



TITLE:

京大広報 No. 375

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 375. 京大広報 1989, 375: 759-766

ISSUE DATE:

1989-07-10

URL:

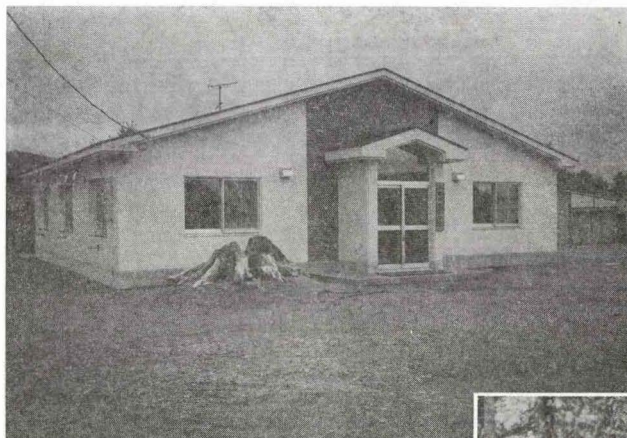
<http://hdl.handle.net/2433/209302>

RIGHT:

# 京大広報

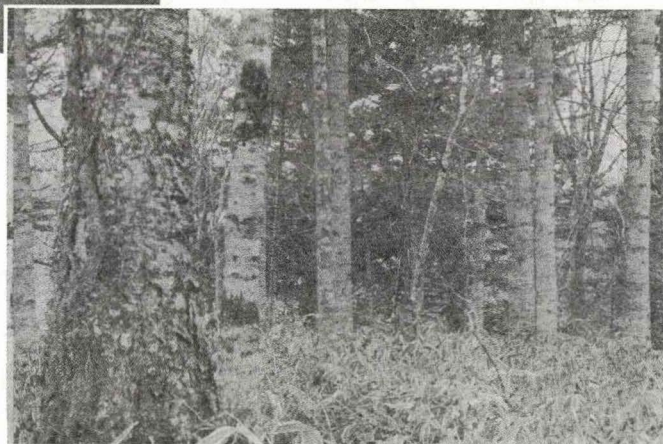
No. 375

京都大学広報委員会



完成した農学部附属演習林北海道演習林  
白糠研究管理棟

—関連記事本文 765 ページ—



トドマツを主体とする針広混交林（北海道演習林白糠区第5林班）

## 目 次

アスベストによる環境汚染対策指針…………… 760

吉田寮在寮期限設定に伴う

一連の措置の完了について（所感）…………… 763

<部局の動き>

農学部附属演習林

北海道演習林白糠研究管理棟が完成…………… 765

ALL 京大舞踏研究会

学生ダンス選手権で団体優勝…………… 765

訃 報…………… 766

日 誌…………… 766

## ＜大学の動き＞

## アスベストによる環境汚染対策について

平成元年 7 月 7 日

総 長 西 島 安 則

学内でのアスベストによる環境汚染を安全委員会並びに環境保全委員会において討議願ったのは、2年前の昭和62年（1987）の夏からのことである。また、同年の10月23日には総長室で、事務局長、庶務部長、経理部長、施設部長、学生部次長に、安全委員会と環境保全委員会で検討が進められている対策への緊急な取組みを指示した。そして10月30日にアスベスト問題協議会の第1回の会合が開かれた。そこでは医学、環境科学、建築学等多方面からの検討がなされ、それと並行して学内の調査が行われた。まず緊急対策が必要であると判断された西部学生食堂、教養部A号館講義室については、その撤去方法について慎重に検討の上、12月29日に工事を開始し、翌昭和63年（1988）3月31日に工事を完了した。この間、入念な環境測定を実施しつつ工事が進められたが、この緊急対策工事の過程において、その後の処理の進め方についての貴重な多くの知見が得られた。翌昭和63年度には前の緊急措置の過程で得られたデータにより作業法が確立し、学内のアスベスト材料使用部分の徹底的な調査を進めつつ、緊急度の高いものから順次着実に撤去工事が進められた。現在までに吹付けアスベスト除去を完了したのは、62年度に約2,000平方メートル、63年度に約1,000平方メートルである。調査結果に基づいて今後確実に除去作業を進め、環境保全に万全を期すべく最大限の努力をしている。

今年2月8日の環境保全委員会において、それまでの「アスベスト問題協議会」を、京都大学環境保全委員会の中の「アスベスト問題小委員会」として改組発足させることとなり、その第1回小委員会は平成元年（1989）2月23日に開催された。

この度「環境保全委員会アスベスト問題小委員会」の作成された「アスベストによる環境汚染対策指針」をここに掲載するにあたり、委員長糸川嘉則教授をはじめ、同委員会委員のご尽力に厚く感謝し、今後とも関係者の一層のご理解とご協力を重ねてお願いする。

## アスベストによる環境汚染対策指針

環境保全委員会アスベスト問題小委員会

## 1. アスベスト問題の経緯

珪酸塩鉱物であるアスベスト（石綿）はその繊維性構造と耐熱性、耐火性、耐腐食性などの特性から、建築材料をはじめ多くの用途で使用されてきた。本学においても昭和30年代より昭和50年前後までに建設・改修された施設の中には天井、壁などにアスベスト吹付けが行われている。一方、アスベストの人体影響については、昭和初期からアスベスト肺が確認され始め、昭和30年代にさら



に肺がん、悪性中皮腫もアスベスト暴露により生じる疾患として認知されるに至った。これらの疾患が明らかになってきたことから、我が国でも昭和47年より「労働安全衛生法」「同法施行令」「特定化学物質等障害予防規則（特化則）」等において労働環境におけるアスベスト規制がなされ、アスベスト吹付け作業の事実上の禁止、石綿粉じんの管理濃度等が定められている。また最近では大気汚染防止法の改正により、アスベストを「特定粉じん」に指定し、アスベスト製品工場などの事業者には工場施設の設置届やアスベスト濃度測定を義務付けるなどの動きが見られる。これに対し、一般環境中におけるアスベスト規制に対しては我が国では対応されていない。米国では環境保護庁（EPA）等が中心となり教育施設におけるアスベストに対し、種々の対策が講じられつつある。京都大学においても、昭和62年10月より本学環境保全委員会、安全委員会において、京都大学におけるアスベスト対策の必要性について検討を開始した。その結果、アスベストの非職業的暴露に関しては未だ定まった説はないものの、本学の教職員・学生等の健康面への最大限の配慮、良好な教育研究環境の確保という視点からアスベスト対策を検討する必要があるという結論に達した。

昭和62年10月9日の第49回環境保全委員会ならびに昭和62年10月21日の第84回安全委員会の審議により設置されたアスベスト問題協議会（仮称）は昭和63年12月27日まで、計14回開催され精力的な検討を進めてきた。その後、平成元年2月8日の第56回環境保全委員会において、同協議会は「京都大学環境保全委員会アスベスト問題小委員会」として、発足されることが決定された。本小委員会の委員は下記のとおりである。なお、連絡調整は糸川教授、及び高月教授があたることとなった。

委員長	医 学 部 教 授	糸 川 嘉 則
委 員	教 養 部 教 授	児 嶋 眞 平
〃	環境保全センター 教 授	高 月 紘
〃	胸部疾患研究所 助教授	大 井 元 晴
〃	保健管理センター 所 長	小 川 隆 三
〃	工 学 部 教 授	森 田 司 郎
〃	医 学 部 講 師	川 西 正 祐
〃	庶 務 部 長	加 藤 義 行
〃	経 理 部 長	島 田 直 樹
〃	施 設 部 長	大 矢 誠
〃	学 生 部 次 長	磯 脇 和 平

昭和63年3月までにとられたアスベスト緊急対策については京大広報 No. 355（1988. 7. 1）にて報告済みであるが、今回は長期展望にたったアスベストによる環境汚染対策に関する指針について報告する。以下の指針は「京都大学環境保全委員会アスベスト問題小委員会」において審議・承認されたものであり、本問題に対する本学の当面の方針を示すものである。

## 2. 新規建築材料に関する指針

今後、新規に建築する新営建物については可能な限り、吹付けアスベストの使用を控えるものとする。また石綿スレートをはじめとする石綿セメント製品などの建築材料の使用に関しても、アスベスト飛散等の影響を最大限考慮するものとする。

### 3. 吹付けアスベストに関する指針

現在までのアスベスト消費量から見れば、石綿スレートをはじめとする石綿セメント製品の消費量が7割程度を占め、吹付けアスベストの消費量は全体の1割程度と推定され、その占める割合は小さい。しかも昭和50年の特定化学物質等障害予防規則改正後は原則的に吹付けアスベストの使用は禁止されている。しかし一方、アスベストを含有する建材で、経年劣化等によりアスベスト繊維を遊離する可能性が大きいと見られるのもこの吹付けアスベストである。そこで本学においては吹付けアスベストによる環境汚染対策を最優先させることとし、緊急対策等の対策を実施してきている。この吹付けアスベストに対する基本的指針は、

- ① 環境汚染対策を実施する吹付けアスベストはアスベスト含有率が1%以上を対象とする。この濃度は現在の測定技術で確実な検出可能な下限濃度に相当するものである。
- ② 汚染対策の優先度決定には吹付けアスベスト材料のアスベスト濃度、ならびに固着状況を考慮し、衛生面、使用人数等を加味することとする。
- ③ 汚染対策方法は基本的には撤去法を原則とし、撤去法の適用が困難な場合にはクリーンルームの設置等の措置をとり、アスベスト濃度のモニタリングを実施の上、使用するものとする。対策工法は建設省住宅局建築指導課監修「既存建築物の吹付けアスベスト粉じん飛散防止処理技術指針・同解説」に準ずるものとする。
- ④ 対策実施後の当該教室等の使用可能性の判断、対策効果の確認等のため、アスベスト濃度測定を実施する。測定方法は環境庁のモニタリング法に準じ、当面はメンブランフィルター採取後、位相差顕微鏡により検鏡する方法を採用する（注参照）。これはアスベスト濃度測定法としては透過型電子顕微鏡による方法もあり得るが、当面の実施の難易性を考慮したものである。

本指針に準じた形で、事務局施設部において最大限の配慮をもって、昭和62年度に教養部A号館講義室、西部学生食堂に存在した約2,000㎡の吹付けアスベスト撤去工事を実施した。また昭和63年度には次のような対策を実施した。文学部東館実験室空調機室、法学部法経北館屋階ファンルーム、医学部動物実験施設排風機室・集塵機室・発電機室、工学部坂記念館油圧源室・9号館NMR測定室、教養部A号館A地5講義室、人文科学研究所東洋学文献センター歴史研究室・芸術史作業室・事務室、ウイルス研究所本館5F恒温室・513号室・ミクローム室、原子炉実験所污水处理槽管理棟機械室、胸部疾患研究所図書室について、約1,000㎡一計18室の吹付けアスベスト撤去を、また法学部法経北館空調機械室、医学部動物実験施設機械室、工学部8号館機械室・空調機械室、胸部疾患研究所ボイラー室・電気室、施設部法経北館管理人室・ボイラー室について、クリーンルーム設置、マスク着用、使用制限等の暫定対策を実施した。

### 4. 現存施設の解体・改修に関する指針

アスベストによる一般環境汚染への影響を考えた場合、吹付けアスベストとともに重要な課題と考えられるのが、現存施設の解体・改修時における石綿製品からの飛散の問題である。この判断は上述したとおり、石綿製品の使用量が極めて多いこと、陸地から遠く離れた離島においても低濃度ながらアスベストが検出され、かなり広域のアスベスト拡散がおり得ると考えられることなどにもとづく判断である。しかしながら、解体・改修時のアスベスト対策工法としては、現実的で、しかも効果のある決定的な工法がないのが現状である。そこで当面の対策として、①湿潤化法、②シート養生法、③機械解体の実施抑制などの方法を検討するものとする。今後の本部工事、部局工事

とも施設の解体・改修に際しては、施設部、環境保全センターと連携を図り、解体・改修に関わるアスベスト飛散の影響を考慮しつつ行うものとする。

## 5. アスベスト廃棄物に関する指針

アスベストを含む廃棄物を最終処分した際の飛散、処分地の再利用時の影響など、アスベスト廃棄物に関する指針は重要な課題である。そこで本学の当面の指針としては、

- ① 吹付けアスベスト廃棄物は固化のうえ、当面は学内に保管するものとする。
- ② アスベスト成型製品（ボード、実験器具等）や対策工事に関わる低濃度のアスベスト付着物は現行の行政指導に従い処分するものとする。

なお、アスベスト廃棄物に関する指針は廃棄物処理処分法の研究開発状況を見極めたうえで、再検討し指針の見直しを図るものとする。

## 6. 今後のアスベスト対策について

今回、本学におけるアスベスト対策として、世界的な標準対策を参考にしつつ、長期的展望にたった対策指針の策定を行った。今後は本指針にもとづき、効果的な対策を実施することが肝要である。そのため、今後は新規のアスベストに関する課題を本小委員会において検討を進めるとともに、指針運用にあたっては本部事務局、環境保全センターが中心となり、その経過を小委員会へ報告するものとする。これらのアスベスト対策を遂行する際には、教職員・学生の健康面、不安感を第一に配慮して、本問題に対する対策を多面的な配慮のもとに進めていく所存である。

注) 環境庁では「アスベスト発生源対策検討会」において、アスベストの排出実態、一般環境濃度の実態等を把握してきており、昭和60年度より環境濃度の長期的モニタリングを開始している。一般環境中のアスベスト濃度を測定する方法の一つがメンブランフィルター捕集・位相差顕微鏡法であり、 $5\mu\text{m}$ 以上の長さで、長さとの比が3:1以上のアスベスト繊維を検出するものである。通常、 $[f/l]$ として表示される単位は1リットル中に存在する繊維数( $f$ )を表している。



## 吉田寮在寮期限設定に伴う一連の措置の完了について（所感）

平成元年7月7日

総 長 西 島 安 則

この度、平成元年（1989）4月18日の評議会において、吉田寮の在寮期限設定に伴う一連の措置の執行を完了したことが承認されるに至る間の経緯は、本学の学寮の歴史において一つの時期を画したものであると考えている。

学寮（学生寄宿舎）の歴史は、本学の創立と同時に始まっている。

それより以前、今からちょうど100年前の明治22年（1889）に、第三高等中学校寄宿舎、食堂、賄所及び浴室がこの吉田の新しい校地の松林の中に建設された。現在の本部構内、百万遍の裏門を



入った左側の所であった。

明治30年(1897)に本学が創立され、この寄宿舎を譲り受けた。そして、学生寄宿舎は学生の研学修養上の重要な機関として位置付けられた。寄宿舎生活における各舎生(寮生)の自由と寄宿舎の自治のあり方については、この初期の頃からその理想と現実との間に揺動があって、木下廣次初代総長の時に、寄宿舎の一時閉鎖の後の再開(明治39年(1906))にあたって出された告示にも、「大学寄宿舎が学生の研学修養上重要な一機関たるべき所以<sup>ゆえん</sup>のものは、在舎生が特に規律あり制裁ある一つの切磋団体を組織するに在って存す」と述べられている。

昭和60年(1985)12月16日、私が総長に就任した時、吉田寮の在寮期限として設定されていた昭和61年(1986)3月31日は、わずか3ヶ月半後に迫っていた。まず、在寮期限の到来の時に、強制的に吉田寮の寮生を退去させ、吉田寮を老朽建物として機械的に撤去することは、本学の学寮問題の基本的な解決にはつながらず、かつ、在寮期限設定に至る本来の趣旨に沿うものでもないと考えた。そして全学的事項に関する大学の意思決定機関である評議会の決定を尊重して、その基底にある趣旨を実現するために、本学の学寮の歴史を振り返り、京都大学らしい解決方法を熟考した。その結果、当時の朝尾直弘学生部長と十分協議の上、在寮期限“執行中”という基本方針を採る決心をした。これは、昭和55年(1980)のはじめ以来、昭和57年(1982)の末の評議会で在寮期限が設定されるに至る経緯をふまえるとともに、より永い学寮の歴史を深く思慮しつつ寮生による学寮の伝統的な自治を尊重し、解決の道を誤ることのないよう慎重に進めようというものであった。誠意をもって寮生と話し合っていくなかで、自治の原則に沿った解決への熟成の時が必ず来ることを固く信じていたのである。

寮生との間で厳しい状況の中にもお互いに心を開いた話し合いを持ちうる環境の生まれることが大切であった。笈田知義学生部長、ついで河合隼雄学生部長の在任中、学生部委員会、特にその第三小委員会委員及び学生部の寮担当職員と寮生との話し合いが続けられ、寮生諸君は寮の自治のあるべき途を求めて苦悩した。そして、状況は次第に熟してきた。昭和63年(1988)8月4日の吉田西寮第4棟の撤去は重要な契機であったと考えている。吉田西寮第4棟は、かねてから老朽化の最も激しい建物で、私も学生部長在任中は、台風の子報が出て風が強まると心配でよく夜中でも寮へ走って行き、寮生と共に台風の過ぎるのを待ったことがあった。この吉田西寮第4棟の撤去に際しては、緊迫した空気ではあったが、河合学生部長、学生部委員が現場で寮生と話し合い、吉田寮寮生大会の結論を待って作業が開始された。その夜、学生部の会議室で学生部委員、学生部職員が集って懇談した。皆撤去作業が終了ということよりも、その一日の経過の中で寮生との間に開かれた確かな心のつながりを感じることができたのである。その喜びで涙を流している教職員もあった。それは長い間延々と続いた暗いトンネルを一步一步と歩んでいるうちに、その行く先に確かな明りを見る思いであった。

昭和63年(1988)10月17日の学生部委員会において「本年度中に在寮期限設定に伴う吉田寮問題の解決をみるよう努力する」という基本方針が決定されたのは、そのような時の成熟の結果であった。吉田寮生と学生部委員との間でさらに度々話し合いが続けられ、11月から翌年の2月にかけては河合学生部長と吉田寮自治会との話し合いが重ねられた。そして、その中で次第に具体的な解決への道が浮かび上がってきた。吉田西寮の撤去と吉田東寮の補修という当面の方策が練られる中で、吉田寮の将来像についても論議が深められた。

平成元年(1989)1月23日、吉田寮自治会が真剣な討議の結果として、要求書を河合学生部長に提出した。そしてそれに応じて、同日、河合学生部長から回答書が出され、これを基礎にしてさら

に具体的な話し合いが進められた。平成元年（1989）3月25日、吉田寮自治会との合意に基づいて、吉田西寮の第1棟及び第2棟が撤去された。そして3月27日付けで「吉田寮入寮禁止措置解除」が公示された。この間、吉田東寮の一部補修も行われ、また4月14日には吉田寮入寮者名簿が提出され寄宿料が納入された。

平成元年（1989）4月18日開催の評議会で、佐野哲郎学生部長よりこれまでの経過が報告された。総長は評議会に対し、在寮期限の設定に関連した全ての措置を終了したことの承認を求め、これが承認された。

この間になされた多くの関係者のたゆまぬ努力と全学の理解と協力によって、京都大学らしい学寮の歴史の中で意義ある一步が踏み出されたものと私は信じる。心をこめてこの問題の正しい解決のために力を尽くしてくださった関係者の皆様に深い感謝の気持ちを表したい。

### ＜部局の動き＞

#### 農学部附属演習林北海道演習林 白糠研究管理棟が完成

農学部附属演習林北海道演習林<sup>しらぬか</sup>白糠研究管理棟の竣工披露が、6月22日（木）白糠町勤労者センターにおいて、関係者約60名が出席して行われた。

式典は新管理棟を見学の後午前11時から始まり、武居有恒演習林長の式辞に続いて、南 芳美施設部企画課長（施設部長代理）による工事経過報告、千葉 清白糠町長らの来賓から祝辞が述べられた。次いで工事関係者3団体、及び今年が北海道演習林創設40周年にあたるため、これまでご協力いただいていた地元2団体（白糠町と<sup>しべちや</sup>標茶町）、1個人（吉野廣次氏）のそれぞれに感謝状

及び記念品の贈呈が行われた。引き続き菟谷利夫事務局長の挨拶によって祝賀会に入り、松本英雄大蔵省釧路財務事務所長の発声で乾杯し、終始なごやかなうちに午後1時閉会した。

新研究管理棟は鉄筋コンクリート平家建153.64㎡で、研究室、事務室、会議室兼食堂、宿泊室があり、昨年9月に着工し、今年1月に竣工した。道東の厳しい気象や泥炭地という軟弱な地盤を配慮した工法が用いられており、またこれまでのものに比べて居住環境は飛躍的に向上し、機能的にも格段の充実を見るに至った。森林に対する社会的関心が高まっている今日、本施設が完成したことにより大いなる意義を感じるとともに、関係者各位のご尽力、ご支援に感謝する次第である。

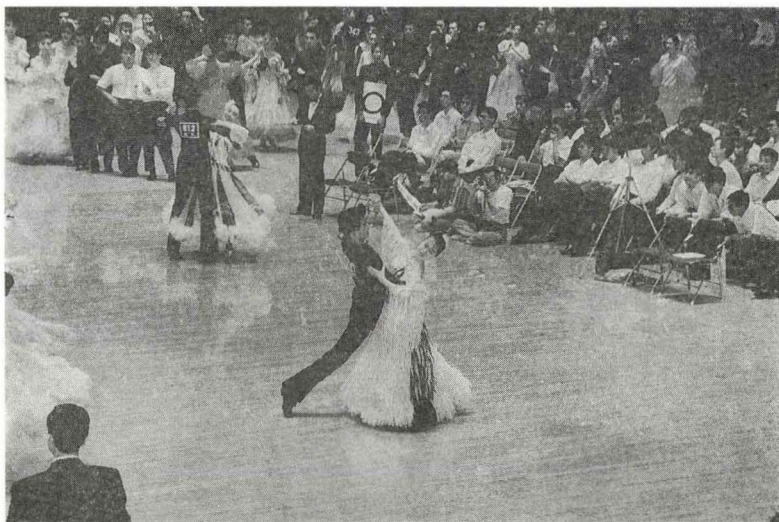
なお、参考までに林相写真を表紙に掲載した。

（農学部附属演習林）

#### ALL京大舞蹈研究会 学生ダンス選手権で 団体優勝

平成元年6月25日（日）、神戸市立中央体育館で行われた第27回全日本学生選抜競技ダンス選手権大会で本学ALL京大舞蹈研究会が団体の部で優勝した。

（学生部）





## 計 報

## 尾崎良平名誉教授

本学名誉教授尾崎良平先生は、6月29日逝去された。享年73。

先生は、昭和15年京都帝国大学工学部を卒業後、本学助教授、関西大学教授を経て昭和38年工学部教授に就任、同55年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を授与された。

本学退官後は、京都職業訓練短期大学校校長を

務められた。

先生の専門は鑄造工学、金属凝固加工学で、中でも球状黒鉛鑄鉄の研究において数多くの優れた研究業績を残された。主な著書に『球状黒鉛鑄鉄の理論と実際』がある。

これら一連の研究活動、学術上の貢献に対し、昭和41年日本鑄物協会功労賞、49年日本金属学会論文賞、50年日本鑄物協会飯高賞、56年日本鑄物協会久保田鉄工賞を授与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。(工学部)

## 日 誌

(1989年6月1日～6月30日)

- |      |   |     |   |
|------|---|-----|---|
| 6月1日 | ドイツ日本研究所 J. Kreiner 所長来学、総長及び関係教官と懇談                          | 17日 | 創立92周年記念式典                              |
| 3日   | 教育学部創立40周年記念式典  | 〃   | 名誉教授懇談会                                 |
| 8日   | イタリア共和国 Siena 大学 F. Casprini 副学長ほか3名来学、総長及び関係教官と懇談            | 19日 | 創立記念行事「音楽会」                             |
| 9日   | 同和問題委員会   | 20日 | ブルガリア人民共和国大使館 P. Nikolov 教育担当官来学、総長と懇談  |
| 10日  | 工学部公開講座「拡がりゆく工学」第1日(以後、6月17日、24日、7月1日)                        | 21日 | 国際交流委員会                                 |
| 14日  | オーストラリア大学長会議代表団 B. G. Wilson 団長(Queensland 大学長)ほか8名来学、関係教官と懇談 | 〃   | 国際交流会館委員会                               |
|      |   | 22日 | 朝鮮民主主義人民共和国科学院 金 景峰院長ほか3名来学、総長及び関係教官と懇談 |
|      |   | 27日 | 評議会                                     |
|      |   | 29日 | 創立記念行事「学術講演会」                           |

## (お知らせ)

前号(Na374)に掲載の「創立記念式典の挙行」の記事中、永年勤続被表彰者氏名の学報掲載については、都合により6月30日付学報4312号に変更しました。

